

発行：やきものの里プロデュース倶楽部

丹波焼の手仕事 匠の技 6
丹誠窯「葉文」 大西誠一氏

最古の登窯×グループ窯
大蛇に挑む

インタビュー
「人間 そして生きる」
陶芸家 林康夫氏

丹誠窯 工房



丹誠窯 大西 誠一
〒669-2114
兵庫県篠山市今田町下立杭40
電話：079-597-3255
文・写真 迫田 隆



丹波の手仕事
匠の技 6
丹誠窯「葉文」 大西誠一氏

三田を過ぎ釜屋から北上する道を下立杭に入った辺りに、大きな壺を掲げた看板が見えてきます。お店とギャラリーとを兼ねた土蔵造りの瀟洒な建物に私たちが迎えてくれます。丹誠窯大西誠一氏に丹波焼の伝統的な技「葉文」ようもん・はもんについてお話を伺うため訪問しました。

会社勤めを経験された後、窯元であったお父様の元で焼き物作りを学ばれた大西氏は、登り窯での焼成にこだわりの伝統的な焼き物作りを続けてこられました。古い丹波焼にも興味があった、骨董の市に出かけた大西氏の壺を見て面白いなあと感じたことが葉文に興味を持たれたきっかけだそうです。

「葉文の古いものは、黒っぽい土に葉を貼り付けたものが多くあまり葉文が目立たない。そこで、葉を貼り付けて白化粧をし、貼り付けた葉はがすなど、自分なりに葉文が目立つように工夫をした。葉文の場合、白化粧するが釉薬はその上からは掛けず、登り窯で焼成するためその方が面白いものが焼ける。ちなみに丹誠窯では、素焼きはほとんどせずに、本焼きで焼き上げる。白化粧に使う土は、地元で採れる白い土を原料に使っている。丹波焼では、地元で採れる原料・材料を大事にしているという思いが強い」と話されます。

「葉文に使われる葉は、昔のものでは南天や羊歯、紅葉などいろいろ葉が使われているが、丹誠窯では『難を転じる』ことから南天の葉を使っている。使われる葉は、前もって暇を見つけては探して気に入ったものがあれば採って、分厚い本に挟んで押し葉にしておく。大きさ、形、葉の広がり、左右のバランスなど様々で、いろいろなものがあるので、取り置いたものの中から器や作品の大きさに合わせて選んで貼り付ける。若葉は柔らかすぎるので、もう少し熟ったものの方が良い」と葉の一枚一枚にもこだわりを持って選んでいるそうなんです。

兵庫陶芸美術館の作陶講座や小中学校などの学社連携事業にも進んで取り組んでおられる中で、気が付かれたことを質問させていたたくと、「作陶講座に参加される方は、目の前にろくろがあるのと、すぐに形あるもの、作品を作りたと思う方が、基礎をもっとしっかり学ばれることが大切だ」と思う。やはり基本は土揉みだと思ふ。土揉みがしっかりしてないと、傷が入りやすくなったりする。小学生の「窯元修行」で来られたときは、四ツ辻の土取場へ案内し、組合の土工場も見せよう。子供たちにはそこから丹波焼について学んでもらうようにしている」と話され、長年丹波の地で、お祖父様やお父様から伝わった薪で焼く登り窯での焼締め陶一筋でやってこられた経験から、伝統を大切にされておられます。

「丹波の土は他の産地と比べて扱いにくいと言われる。そこで丹波焼では独特の「はさで（ろくろで成形するとき用いる綿布）」が使われてきた。特に大物づくりなどで、土を締める、作品を仕上げるには何度も土を触ることなく、しっかりと成形するためにも使われてきた。これまで丹波焼に伝わってきたこのような伝統の技術をもっと伝えるべきだと思ふ」伝統工芸士として、次の世代へ丹波焼の伝統を伝えていこうという、強い思いを熱く語っていただきました。

兵庫陶芸美術館 展覧会の見どころ

●特別展のご案内

セラミックス・ジャパン 陶磁器でたどる日本のモダン

平成28年9月10日(土)～11月27日(日)
日本の近代陶磁のデザインは、同時代の国内外の動向や芸術様式に呼応して、多様な変化を遂げてきました。本展では、明治維新から第二次世界大戦までの約70年間にデザインされた、食器をはじめとした幅広い用途の陶磁器を紹介。明治・大正・昭和 レトロでモダンな魅力あふれる数々のデザインをお楽しみ下さい。

〔帝国ホテルライト館洋食器〕 制作：日本陶器 1955-67(昭和30-42)年
デザイン：フランクロイド・ライト 1922(大正11)年頃 個人蔵



やきものを分析する -釉薬編-

平成28年12月10日(土)～平成29年2月12日(日)
やきものは、人類が化学変化を意識的に応用し、生みだされたといわれていますが、現在に至るまでには、形や色合い、装飾などにさまざまな技術が取り入れられ、変化してきました。本展では、やきものの製作過程の中から、器面を彩るさまざまな色合いを生み出す釉薬に焦点をあて、その歴史や特徴を当館の古陶磁および現代陶芸コレクションを通してご紹介します。



三田「青磁龍文手付鉢」 江戸時代後期 兵庫陶芸美術館

丹波焼と三田焼の粹を集めて -森基コレクションの名品-

平成29年3月4日(土)～5月28日(日)
実業家森基(もり)氏は、丹波焼(兵庫県篠山市)と三田焼(同三田市)に魅せられ、50年以上にもわたり精力的に収集しています。本展ではそのコレクションから約150点を選び、丹波焼の変幻自在ともいえるスタイルの変遷や、三田焼の豊富なバラエティーをご紹介します。



丹波「徳利」 室町時代後期～桃山時代(16世紀末～17世紀初) 個人蔵

兵庫陶芸美術館 〒669-2135 篠山市今田町上立杭4 電話：079-597-3961 (代表) HP <http://www.mcart.jp>

イベント案内
第39回 丹波焼陶器まつり
「一器一会(いちこいちえ)」あなたとつわの大切な出会いをテーマに、丹波焼の魅力あふれる多彩なイベントが催されます。

●期間
10月15日(土)～16日(日)
午前9時～午後5時まで

●会場
兵庫陶芸美術館

●陶芸文化プロデューサーによる「セレクトショップ」(窯元へ出向き選んだお好みの品です)
●若玉づくり、缶バッチづくりなどの楽しい体験コーナーや軽食コーナーもあります。
●窯元群を一望できるウッドデッキからの眺めもお薦めです。

●陶の郷
「丹波焼のある食卓」
「丹波焼「うつわdeレシビ」、匠の技新作展」
「丹波大茶会」「日本酒四重」
「丹波自慢の食材を使った料理や地酒等をお楽しみ頂けます」
「ひょうごの物産コーナー」やチャリティオークションなども催されます。

●今田支所周辺
●窯元ごとにテントが並びます。(陶器市)
●黒枝豆、丹波栗、新鮮野菜の販売や飲食コーナーもあります。
●窯元周辺
●上立杭旧公会堂のギャラリー「24マス」では「手のひらサイズのやきもの展」を開催。展示販売します。

●問合せ
丹波立杭陶磁器協同組合
電話：079-597-2034
交通のご案内
会場付近は交通規制があります。各所に設置の駐車場をご利用ください。
各会場への移動は巡回バス(無料)をご利用下さい。
電車ご利用の方は
JR相野駅⇄陶の郷 臨時シャトルバス(有料)運行

プレゼントのお知らせ

兵庫陶芸美術館・陶の郷・こんだ薬師温泉の招待券をセットでペア5組10名様にプレゼント。

●応募方法
ハガキに 〒住所・氏名・年齢・本紙の入手場所(〇〇美術館など)・ご意見・ご感想をご記入の上、下記の宛先までお送りください。

●締め切り
2016年12月15日消印有効。応募多数の場合は抽選になります。

●宛先
〒669-2135 篠山市今田町上立杭4
兵庫陶芸美術館内「陶芸文化プロデューサー」宛
なお、ご応募頂いた方の個人情報(当選者への発送、本紙企画の参考以外の目的には使用いたしません。また当選発表は発送をもってかえさせていただきます。

◇丹波焼最古の登窯の焼成を一般公開！
築窯1200年の丹波焼最古の登窯。2カ年かけて大修復を行い、昨年、初焼成を実施しました。今年は、大人から子どもまで多くの方々の作品を詰めて、11月18日(金)20日(日)まで昼夜をとおして焼成します。47メートルの窯から吹き出す炎と煙、1300度の炎に焼かれる作品を体感してください。(見学自由)

●期間
11月18日(金)9時頃～
20日(日)夕方(予定)

●会場
篠山市今田町上立杭
最古の登窯

●問合せ
丹波の登窯復興と丹波焼の里活性化推進委員会
(兵庫陶芸美術館内)
電話：079-597-3961

周辺の施設

こんだ薬師温泉「ぬくもりの郷」
源泉かけ流しの天然温泉
会期中は陶器市バス停からマイクローバスで送迎致します。また、お食事処、物産の販売場もあります。

丹波伝統工芸公園

立杭 陶の郷

〒669-2135 兵庫県篠山市今田町上立杭3
TEL.079-597-2034 FAX.079-597-3282
URL:<http://www.tanbayaki.com/>
【入園料】高校生以上 200円
小中学生 50円

年中無休

開園時間
4月～9月 AM10:00～PM6:00
10月～3月 AM10:00～PM5:00

但し、年末年始は除く

窯元横丁

丹波焼の窯元すべての作品を買うことが出来る「窯元横丁」。どこか懐かしくあたたかな空間で、ゆったりと買い物をお楽しみいただけます。伝統的な丹波焼からアーティストックな作品まで、約52軒の窯元のさまざまなやきものが展示販売されています。一つひとつの作品をじっくり手にとりながら、散歩気分であらためてみてください。見ているだけでも楽しくなりますよ。

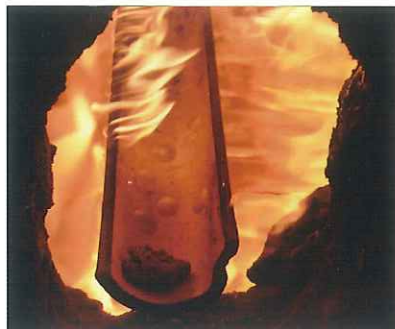
陶芸教室

丹波焼の郷で、陶芸体験してみませんか？初心者の方には手びねりや板づくりで、腕におぼえのある方には電動ロクロでの本格的な陶芸作品に挑戦していただけます。釉薬をかけて焼き上げてから、ご自宅まで宅配便で発送いたします。あなただけのオリジナルやきものをつくってみるのも楽しいですよ。

大蛇に挑む

「最古の登窯×グループ窯」

丹波最古の登窯が約2年間の修復期間を経て初の火入れが行われたのは2015年11月21日だった。その初焼成から約5か月後、2016年4月22日、2回目の火入れが行われた。火入れの主は「グループ窯」。丹波の郷の若手作家で構成されるグループだが、その歴史は長く来る40周年を迎える。この丹波は多くの窯元が登り窯を所有しており、近年では他家と共同で窯焚きすることが少なくなっていた。しかし「グループ窯」は9軒の窯元が集い、共に窯を焚いた。昨年、生まれ変わったばかりの47mの巨大な窯は未知数の部分も多く、焼成中に窯の一部が崩れ落ちるという予想もしないアクシデントも発生した。しかしその困難がメンバーの結束をより強くしたのかもしれない。最も新しく加入した市野翔太氏は、「先輩方の指導を受けたことができて、得難い体験をした」と語る。かたや、先輩は「率先して動いてくれた」と後輩を自慢する。メンバー間の協働だけでなく、遠い昔に「グループ窯」を卒業された先輩方も立ち寄り、アドバイス、励ましなどの多くの声がけがあったという。



窯の中で燃え上がる竹燃料



窯の天井が崩れるというアクシデントも発生

今回、共同窯焚き以外にも、もうひとつの新たな試みもあった。それが竹燃料への挑戦である。代表の上中剛司氏は「昨年の初焼成で竹を燃料として使用した窯の中に、魅力的な赤味を帯びた作品が存在したことが、竹を試すきっかけになった」と語る。従来、登り窯ではアカマツの薪を燃料とするが、初焼成では、篠山東雲高校（ささやま竹林バスターズ）、サポーター、陶芸文化プロデューサーがタッグを組み、試験的に竹を燃料として使用することに挑んだ。アカマツと竹が混在する1300℃の中でどのような融合が起きたのかは誰も知らないが、その袋からは、赤味を帯びたツヤのある作品がいくつとれた。先の初焼成の作品から、竹の可能性を感じた「グループ窯」も、共同焼成の中で竹の使用を決定した。9つある焼成室（袋）の内、下から3番目までに作品を詰め、さらに火が抜けてしまわないように4番目の部屋の走りをコントロールした。竹は3番目の部屋に投入された。竹には入れた瞬間は温度がぐっと上昇するが、燃焼が長続きしないという課題もあり、アカマツと併用して温度を維持しながら3日間の窯焚きが終わった。



窯から取り出された艶やかな赤味を帯びた作品

番目の袋への期待など様々な思いが交錯する中、一週間かけ冷まされた窯の蓋が開いた。その3番目の袋からは赤味を帯びたツヤのある作品がいくつと取り出された。この色合いが竹の力を借りて生まれたものなのか、1300℃の中で生まれた偶然なのか、いずれの確証もない。しかし、昨年に続き今回の作品からも「竹」は、赤味を生むためのエッセンスなのかもしれないと、期待が膨らむ。

一方で、兵庫県下でも竹害がとりあげられる地域があり行き場のない竹が存在する。岡山県・備前では、老朽化して廃棄となった力キ養殖用の竹のいかだを登り窯の燃料として使用された作家がおり、100%竹へ切り替えることは無理でもアカマツと併用することで廃材は補助燃料となるかもしれない。

もしかしら「竹」は、新たな発色を生むためのエッセンスとして、また、アカマツを補完するエコ燃料としての可能性、両面を備えた優秀な素材ではないだろうか。様々な可能性を感じる。現段階では、科学的な裏付けや安定した再現性も確認できていないので、魅力的な赤味は窯の中での偶然の産物かもしれないし、「竹」に多く含まれるケイ素等が何らかの影響を



左から、市野秀作、市野和俊、大西雅文、清水万佐年、上中剛司、市野健太、市野翔太、市野正大、大上祐樹（敬称略）

与えるかもしれない。まだ十分なデータは集まっていないが、この実験が新しい何かを生み出す一歩につながるのではないかと、昨年の120歳を迎えた最古の登窯では、今秋もささやま竹林バスターズや陶芸文化プロデューサーによる竹の試行が予定されている。他方、来年40歳を迎える「グループ窯」の次の活動が楽しみだ。（増田知子）

「グループ窯」は1977年に結成され、丹波焼の振興並びに会員相互の親睦をはかることを目的として、お互いに切磋琢磨し、将来の丹波焼発展のため新しい分野に目を向け積極的に取り組もうとしている。会員は現在9名。主な活動は次の通り。

- ・月例会
- ・陶の郷作陶展（毎年ゴールデンウィークに開催）
- ・神戸そうこう作陶展（年1回）
- ・嵯峨御流展（毎年11・12月開催）

丹波立杭陶磁器協同組合には、「伝統工芸士会」、中堅作家グループ「陶友会」、若手作家で構成される「グループ窯」がある。

Welcome to「丹波焼の里情報コーナー」

（兵庫陶芸美術館展示棟正面入口に向かって左手。渡り廊下側にあります）
兵庫陶芸美術館内にある「丹波焼の里 情報コーナー」。年内、「丹波焼の技法あれこれ Part II」展開催中。会場では、「貼り付け」「葉文」「イチチン描き」「印花」「流し釉」「赤絵」「鉄絵」「象嵌」「釘彫り」「面取り」「鍋（しのぎ）」等、11種類の技法を紹介。やきものの里めぐりや地域内の窯元情報など、コンシェルジュがお応えします。（但し、土・日・祝日のみ）

源泉かけ流しの日帰り天然温泉



緑に囲まれた広い露天風呂で ゆったり、のんびり 農産物直売所、レストランも併設、1日ゆっくりお過ごしください。



営業時間
AM10:00～PM10:00
(PM9:30 受付終了)
定休日 毎週火曜日（祝日は営業）
〒669-2153
兵庫県篠山市今田町今田新田 21-10
TEL.079-590-3377
http://yume-konda.com/

◆入浴料◆
大人 700円
(12歳以上)
小人 300円
(6～11歳)

interview

林康夫展 「人間 そして生きる」

陶芸家 林 康夫 氏



10月22日から兵庫陶芸美術館で「林康夫展」が開催されます。林康夫氏宅をお訪ねし、お話を伺いました。

日本現代陶芸の黎明期より今日まで、ご自身の作陶の歴史をお聞かせ下さい。

京都の陶芸家の次男に生まれましたが、始めは市立美術工芸学校で好きな日本画の勉強をしていました。

戦争が厳しくなり15歳で海軍航空隊の予科練生になり、特攻隊に志願し、激しい特攻訓練で経験した遠近感、錯視は後の制作上で大きな位置を占めるのです。終戦で復員し再び日本画の勉強を志すも中退し、父のもとで陶芸を始めるようになります。家業を手伝った時、父には「自分の仕事をやれ」と言われました。

翌年四研会の結成に参加。「雲」「群鳥」「人体」などオブジェ陶を発表しました。「直孤文」に注目し作品に取り入れました。チエルヌスキー美術館での現代日本陶芸展に出品。その後、四研会退会後、走泥社入会・退会を経て個展を中心制作しました。

大阪芸術大学工芸科で教鞭をとり、現在の住居である京都山科に築窯。

海外の国際陶芸展に出品、受賞を重ねました。現在は、虚と実の空間を立体と平面を重ねる事により表現し、3次元のイメージを更に広げた造形での制作が続いています。



「無題」 1948年 末生流中山文甫会

「オブジェ陶」とは、フォルムと精神において造形性を追求する前衛芸術として、在野

「人体」などオブジェ陶を作られるうちに「直孤文」に注目されるようになったようです。

私が直孤文に注目し、作品に取り入れたのは、いつぱうに西欧のキュービズムと言うのがあり、直孤文は日本のキュービズムだ、とも言われ、立体の作品を創る上でとても興味深く思いました。私は戦後のピカソ世代の者なんです。

日本の埴輪時代に描かれている直孤文は原始的な曲線と直線の組合せのダイナミックな表現です。直孤文VSキュービズム。

直孤文の力強い原始的な文様は、まさに抽象芸術と言えるのではないのでしょうか。立体的に解釈しようと考えました。

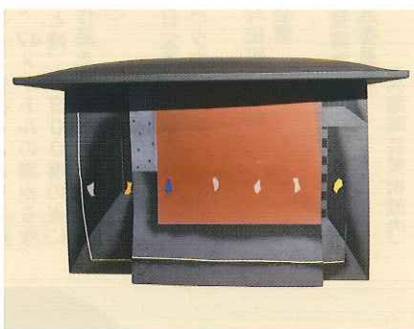
人体をテーマにされたのは。戦時中は人命軽視の体制だったので人間復活の意味でテーマとして制作をしました。

キューブに白い線が入った作品もなかなか思い浮かばない発想ですが、どのようなところから思い浮かべたのでしょうか。

立方体のドローイングから錯視感を見出し、戦時中の錯視空間が蘇り闇夜の3次元がテーマとなりました。このフォーカスシリーズは、マイナス空間に白線を入れることによってプラス空間にする。戦時中「赤とんぼ」という練習機で飛行訓練を受けた時の体験が大きな要素になりました。命懸けの夜間飛行作業での錯視空間。怖さなど消えて闇夜に引き込まれていくような...。それで黒地をベイスに白い線をつかいイルージョン



「波形の如くー3」 1985年 個人蔵



「寓舎'05ー2」 2005年 個人蔵

のような世界を表現してみました。大枠と凝縮する部分とを共存させていくというところがこの作品のテーマです。

「数学とセラミック展」「オペラの舞台美術招待作品」など陶芸の枠を超えたまさに芸術家としてのダイナミックな活動をされていますね。

オペラの製作者と数学者から「芸術には情緒と数学的要素が必要でこの2つの要素があつて普遍性となる」という解答を得ました。

これは「芸術とは胸の内と社会現象と火花を散らしてつくるもの」「幅を持たずに価値を決めてはいけない」「やろうとする精神があるかないか」「意識しているかどうか」という私の芸術感に共感してもらえ人達がいます。という意味で大きな喜びとなりました。

近年の「寓舎」というシリーズをはじめ、常に新しい作品を作ることには挑戦し続けておられますが、そのお気持ちの根底に有るものはなんでしょうか。

このシリーズは「寓舎」という字の如くこの世は「仮の宿」、人間如何に生きるかを念頭にした意のテーマです。作者は作品によって問題を提示しますが、同時に自分の提案したものは自分で解決しなければいけません。私は人間、そして生きるということを陶芸で考え表現しています。

「量ひと目でも前にいく姿勢」

林康夫氏プロフィール	1928年	京都に生まれる
		京都市立美術専門学校日本画科中退（現京都芸大）
主展覧会歴	1947～57年	四研会に出品
	1962～77年	走泥社に出品
	1950年	現代日本陶芸展
	1972年	（パリ）チエルヌスキー美術館展
	1973年	フアンエンツァ・マエストロ展
	1974年	招得出品
	1975年	オビドス・ピエンナレ（フランス）受賞
	1976年	日本の美術工芸（ロンドン）
	1977年	伝統と前衛（ロンドン）
	1978年	林康夫作品集を河出書房新社より刊行
	1979年	数学とセラミックス展（国際数学会会・ベルリン会議併催）
	1980年	京都文化功労者
	1981年	京都文化賞受賞
	1982年	オペラ・牡丹亭・舞台美術（ニースとカンヌ）
	1983年	変容工芸の言語展（フランクフルト）
	1984年	チエルヌスキー美術館展（ニューヨーク）
	1985年	林康夫展（パリ）ミタミウジヤム
	1986年	陶磁ー日本陶芸の伝統と前衛（セーブル美術館）
	1987年	SKULPTURAN
	1988年	（Galerie Marlene Heiler）
	1989年	日本・スペイン現代陶芸展（東京・パレンシア）
	1990年	日本の現代陶芸・伝統と新風の精展（江津・瀬戸）
聞き手	2011年	陶芸文化プロデューサー
		南川ヒロミ
		山地 峯雄
		増田 知子
		迫田 隆